

はしがき

本論集は近代ロシア・スラブの文芸・思想に現れた世界観の特徴を多面的に性格づけようとする共同作業の一部で、「文芸と視覚」、「文芸と政治」、「文芸と異文化接触」といった問題の枠組みを意識しています。

掲載順で最初の3点は、ロシアにおける文学と美術もしくは文学と視覚の深い関係を扱っています。小椋論文は20世紀初頭の作家レーミゾフにとっての絵画の意味を、鴻野論文(ロシア語)は同じ時代の作家ベールィの小説における眼と復活のモチーフを中心に論じています。福間・望月論文は、現代作家ソローキンの小説に19世紀美術史へのアリュージョンを読み取ろうとしています。越野論文と佐藤論文は対ナポレオンの祖国戦争と第二次大戦(大祖国戦争)という二つの戦争と文学の関係論。越野論文は歴史小説のジャンル形成という視点から、佐藤論文は戦争観の文学表現という視点から、この問題を捉えています。山本論文、大須賀論文、古川論文、高橋論文は、19世紀中期からスターリン期にかけての政治と文芸の諸相を扱っています。山本論文はスラブ主義思想家サマーリンのバルト・ドイツ人問題に対する姿勢、大須賀論文は亡命思想家ベルジャーエフのスラブ主義への態度、古川論文は1930年代に書かれたプラトーフの『ジャン』におけるオリエンタリズム、高橋論文は同じ30年代のソ連歌謡と「ソヴィエト語」の相互関係を論じています。阿部論文も政治と文学もしくは政治的文脈での異文化接触の問題を扱っていますが、ここで扱われているのはクロアチアとロシアの血を持つ旧ユーゴ作家で、祖国を失った市民を自認するマトヴェイエーヴィチの経験です。2編の岩本論文はともに現代ロシア文芸を扱っていますが、ひとつはロシア・ブッカー賞受賞者である現代女性作家ウリツカヤの創作とそれをめぐる言説、もうひとつは現代文学と麻薬という興味深い問題を論じています。

本論集は転換期の文芸思潮を通じてロシア的時空間意識の特徴を分析しようとする科学研究費基盤研究(B)-1『転換期ロシアの文芸における時空間イメージの総合的研究』(代表者望月哲男)の成果の一部であり、同時に科学研究費基盤研究(A)『スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗のパラダイム』(代表者望月哲男)の準備作業の意味を持つものです。研究の組織運営において21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」(代表者家田修)の連携を得、同研究報告集の一巻として出版させていただきました。

本書の内容はスラブ研究センターHP『現代ロシア文学データベース』にも掲載されます(<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/literature/literature-list.html>)。忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

北海道大学スラブ研究センター
望月哲男
tetsuo@slav.hokudai.ac.jp